

研究

中学生の精神的健康状態とその要因に関する検討

— 第一報 3年間の縦断調査 —

荒木田美香子¹⁾, 高橋佐和子²⁾
青柳 美樹¹⁾, 金森 雅夫³⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は中学生の精神的な不健康及び欠席行動の3年間の変化を把握すると共に、その予測要因を縦断的に把握することである。対象者は静岡県西部に位置する5市町村の8中学校における、平成11年度の中学1年生1,010名であり、3年間の質問紙による縦断調査を行ない、以下の結果を得た。

欠席日数は1年次に比べて2年次に増加した。3年次にはやや減少を示す学校と上昇する学校に分かれた。中学生の精神健康度不調者は学年進行と共に増加し、3年次においては男子38.2%、女子49.9%が精神的不良群に分類された。1年次の自尊感情・首尾一貫感覚・ソーシャルサポートは3年次の中学生の精神的健康の、また1年次の自尊感情は3年次の欠席行動の予測要因となると考えられた。

Key words : 中学生, 精神的健康, 欠席行動, ストレス評価, 縦断調査

Junior High School Students, Mental Health Status, Absenteeism, Stress Appraisal,
Longitudinal Study

I. はじめに

近年、不登校の増加、家庭内暴力、ひきこもりなど、子どもの心の健康を問題視する声が多い^{1, 2)}。また、顕在化した行動の背後には、より多くの不適応状態や精神的な不調を抱える子どもたちがおり³⁻⁵⁾、抑うつ症状を呈する子どもの増加が報告されている^{6, 7)}。このような状況に対して、社会学、教育学、医学、心理学、看護学など様々な立場から研究や実践が行われてきた。また、1995年より文部省の研究事業としてスクールカウンセラーが配置、活用されるようになった。しかし、不登校の出現率の増加は止まっていない。

日本の学校保健の特徴は、毎年の多項目の健康診断を義務付け、そのシステムが確立している点であるが、心理的な発達や不調についての判断は、その方法論が未確立であることもあり、ほとんど実施されておらず、早期発見はベテラン教師や家庭の力量に任せられているといっても過言ではない。

今後、予想される精神的な不調や不登校の一層の増加に対し、スクリーニングをし、予防的な関わりを行うことが求められるが、そのためには精神的な不健康や不登校の予測因子を明らかにすることが不可欠である。そこで、本研究は中学生の精神的な不健康及び欠席行動の3年間の変化を把握すると共に、その予測要因を縦断的

Examination of mental health status and related factors in junior high school students
— A three-year longitudinal investigation.

Mikako ARAKIDA, Sawako TAKAHASHI, Miki AOYAGI, Masao KANAMORI.

1) 浜松医科大学 (保健師/研究職), 2) 浜北市立亀玉小学校 (養護教諭)

3) びわこ成蹊スポーツ大学 (医師/公衆衛生)

別刷請求先: 荒木田美香子 浜松医科大学医学部看護学科 〒431-3192 浜松市半田山1-20-1

Tel/Fax ; 053-435-2832

[1516]

受付 03. 4. 9

採用 03.10.31

に把握することを目的とした。

II 調査方法

1. 対象と方法

静岡県西部の5市町村の8中学校における、平成11年度の中学1年生とその父親、母親を調査の対象とした。調査期間は平成11年から平成13年までであり、各年とも11月に実施した。尚、本報告ではこのうち中学生の結果のみを取り扱うこととした。

平成9年の静岡県74市町村の中学校不登校者の割合は1.13%±0.89であり⁸⁾、調査対象地区を比較的の不登校の割合の高い地区の学校としてア～エ校を、不登校者が報告されていない地区の学校としてオ～ク校を選定した。各地区は人口、学校規模、地域の産業などに違いがあった(表1)。

対象者は1999年11月の調査時期に在籍した1年生全数、男子535人、女子475人の合計1,010人であった。3年間継続して回答のあったものは848人(回収率84.0%)であった。さらに回答に欠損がないもの794人(男子419人、女子375人)(有効回答率93.6%)を分析対象とした。質問紙は担任が中学生を通して各家庭に配布し、1～2週間の留め置きの後、封入した質問紙を担任が回収した。

2. 質問項目

Lazarus & Folkman⁹⁾のストレスの認知的評価モデルをもとに質問項目を組み立てた。

中学生が自らの環境からストレスを認知し、評価した結果として「認知されたストレス」を、そして認知・評価・コーピングプロセスの結果のストレス反応として「精神健康度」及び「登校回避感情」「欠席行動」があると考えた。また、ストレスの認知・評価に関わる要因として、「自尊感情」「首尾一貫感覚」「認知されたソーシャルサポート」を設定した。さらに、精神健康度を予防的観点から考えるとき、ストレス評価に関わる個人的な要因はその生育環境、社会的経験により生成されるため、中学生が認知した「家族システム」を設定した。

i. ストレス反応

a. 欠席行動

各年度末に学校を通じて、欠席日数を調査した。今回の調査対象の主な欠席理由のうち、事故や負傷などによるものは1.2%で、主たる理由は風邪、体調不良、発熱、アレルギー疾患等病欠によるものであった。本研究では欠席行動を忌引き、高校受験などに関わる欠席を除いた年間の欠席日数で表すこととした。また、欠席日数の幅が0～220まで及ぶため、分布から3日以下(78.0～82.5%)、4～9日(13.1～16.6%)、10日以上(4.4～6.9%)の3群に分類し、分析を行った。

表1 調査市町村の概要および欠席状況

市町村	特徴	人口	産業	H9年度の 所在市町村 の不登校の 割合	学校名	1学年 学級	1学級 生徒数	1年次の 平均欠席		2年次の 平均欠席		3年次の 平均欠席		1年次の 30日以上 の欠席者 の割合	2年次の 30日以上 の欠席者 の割合	3年次の 30日以上 の欠席者 の割合
								日数	SD	日数	SD	日数	SD			
A市	市街地	6万人	農業・製造業	1.95%	ア校	6	34~35	7.9	13.7	8.4	15.1	9.0	23.7	5.4	6.4	5.8
					イ校	7	38~39	4.2	15.4	6.9	23.0	9.3	19.8	1.1	3.8	4.9
					ウ校	4	37~38	4.5	25.8	5.5	26.6	5.8	31.9	2.0	3.3	2.7
B市	市街地	58万人	商業・製造業	1.89%	エ校	5	32~33	4.2	17.2	4.9	22.3	7.1	30.9	3.0	3.0	4.9
C村	山村	4,000人	林業	0.00%	オ校	1	32	2.2	20.9	2.5	24.5	1.2	28.0	0.0	0.0	0.0
D村	山村	6,100人	林業・発電所	0.00%	カ校	1	14	2.1	3.5	1.7	3.2	1.2	1.8	0.0	0.0	0.0
					キ校	2	23-24	2.8	2.5	3.2	3.1	1.2	1.9	0.0	0.6	0.0
E町	漁村	1,200人	漁業・観光業	0.00%	ク校	4	32-33	4.0	4.3	5.2	6.2	4.6	2.1	2.4	1.6	2.4
全体平均				1.13%				4.8	18.5	6.1	21.7	7.0	26.8	2.6	3.6	4.0
男子平均								4.6	18.4	5.1	19.0	5.3	22.0	2.1	2.6	3.2
女子平均								5.1	18.7	7.2	24.4	8.8	31.3	3.2	4.6	4.8

